

目が合えば 笑顔でおはよう こんにちは

みかしほ学園では、「挨拶の励行」を掲げていますが、やはり難しいものです。そこで、神戸新聞の「随想」に挨拶についての一文が掲載されていましたので、紹介します。ぜひ一読して下さい。

日本の博物館としては珍しい施設を利用して、他の企業博物館や他社の人事担当者から、コンパニオンや女子社員の研修を依頼されることが多い。

その施設とは、接客研修のための設備。約八十平方メートルの小部屋だが、壁は一面、鏡張り、床は木製フローリング。あたかもエアロビクス訓練室かと見まがうほどのもの。

短期研修は、姿勢、発声発音、歩き方、身のこなし、敬語などの基本を。長期のものは、コーヒーマスターも含め、応用動作まで。

いずれの場合も、事前に「挨拶」について説明する。研修の目的は、とりあえず「挨拶」を完璧に行うことが、接客の第一歩と教える。

そこで「挨拶ができますか」「これからは、努めて挨拶しますか」と問うと、全員がうなずくので、

「挨拶」についてよもやま話をする。

挨拶は、人の心を開く大切な要素であることを、失敗例をあげて説明すると、全員がゲラゲラ笑って聞いている。

つづいて「挨拶」の仕方について基本的に必ず実行されなければならないことを述べる。

あいさつの「あ」は、明るい大きな声をだすこと。これがなかなかできないのだ。オクターブをあげて、腹からの声をだすため、かなり練習を要する。しかしすぐに上達するだろう。

あいさつの「い」は、いつも笑顔である。明るい人は、笑顔が自然とでるが、暗い人は、努力を要する。つねに、心を豊かに楽しくしていないと、どうにもならないもの。訓練次第。

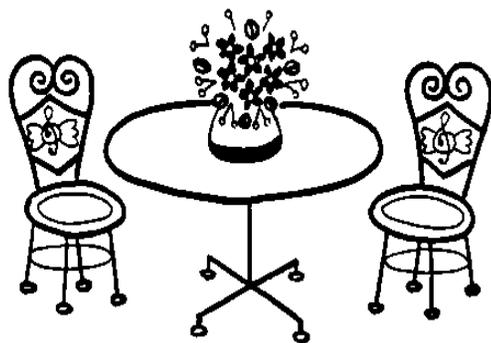
あいさつの「さ」は、人より先に先手必勝。客から先に挨拶される

と落第。顔をあわせたら直ちに、客より先に挨拶すること。本人の強い意志をともなう。

あいさつの「つ」は、つづけて添える。これが一番難しい。挨拶に、目を添え、笑顔を添え、心を添え、言葉を添え、おじぎを添えるのだ。これは簡単に実行できない。場数を踏むのみ。

「挨拶は簡単、すぐできます」といった人達が、このあたりから悩みだす。人間関係の潤滑油として働く「あいさつ」は難しい。

神戸新聞より引用



「はたらく」と「働く」

ギリシャ神話によると、パンドラが主神ゼウスからもらった禁断の箱（壺ともいう）を開けると、その中から貪欲、中傷、虚栄、労苦などの諸悪が飛び出してきた。あわてて蓋を閉めたところ希望が箱の中に残ったという話がある。

その諸悪の一つである労苦は苦心、骨折りという意味を持ち、日本語で対応する言葉として「労働」が当てられるが、この熟語は比較的新しく、伝統的な物は「仕事」ではないかと思う。

日本は農耕社会であって、物を蒔き、苗を育て、田植えをし、施肥を行い、除草をし、その生育を助け、収穫する。これは農民の仕事であって、日々稲の生育を自分の目で確かめ、自己の努力が報われる過程を楽しむことができる。これらの農民の努力は皆みそのもので、衣食住を含む生活の一部をなすものである。

この「労働」と「仕事」の概念的な相異は、欧米からの日本人の働きすぎ非難に結びつくとともに、東西両

社会に人生における「労働」の位置づけに大いにかかわっている。

登山家として高名な初代南極越冬隊長の西堀栄三郎博士が「山に登る場合、登山家とシエルパは同じくらいの重量の荷物を背負うが、その取り組み方や気持ちの持ち方において圧倒的な差異がある。



登山家は登頂という希望を達成するために（いわば楽しみのため）に、シエルパは一種の義務として登るという意識が大きい」ということを言われたことがあった。

私の人生において「はたらく」という行為は、登山家の登山にあたるのか、シエルパの義務の履行にあたるのか。労働という概念に関して、そして人生そのものについて考えさせられるのである。

神戸新聞「随想」より